

## 第十一章 深い遊び

—マイナー・サブシステムの伝承論—

菅 豊

### 一 消えるはずであった伝統

一九九四年、秋。じいちゃんは嬉々としてサケ祭りを取り仕切っていた。

河原には仮設のテントが設えられ、その下の急ごしらえの囲炉裏ではサケの塩焼き、鍋料理などが用意されている。川のかなかでは網で囲いがつくられ、つかみ取り用の数十尾のサケが放されている。かいがいしく働くサケ漁の組合員と、その妻たちは、町外からやってくる観光客の接待で大わらわであった。

「サケのイベントをやるから見に来い」との、突然の連絡をじいちゃんからもらったのは、サケ祭りの一週間ほど前である。町と漁協が協力して、サケのお祭りをするという。「イベント」というじいちゃんには不似合いなことが、妙にほほえましく、懐かしさがこみ上げた私は、何はともあれ見に行くことをその場で約束させられた。

筆者が、じいちゃんと最初に出会ったのは、一九八三年の十月である。伝統的な漁撈技術がこの川に残っていると人づてに聞き、調査という野心から乗り込んだフィールドではあるが、じいちゃんはそんなことは無関係に、漁に関する細々としたことまでいわず教えてくれた。人間が生きるための生産活動、いわゆる生業としてのサケ漁という視点から臨んでいた筆者は、その川でおこなわれている伝統的な漁法に、経済的・社会的な重要性を見いだすことに腐心していた。そして、結果として「伝統的な漁撈技術、漁場使用慣行は、在地の村落漁場管理の論理のもとに成立し、階層差の権益に左右されない平等な経済活動として特別重要な意味をもっていた」という一つの考えに筆者は到達した。

しかし、今回の来訪で、そのような解釈のみでは、いまのサケ漁の実態を理解するには、不十分であるとつくづく思い知らされた。もちろん、いまでもその解釈自体が間違っているとは思っていないし、かつてのサケ漁の存在形態を想起するうえで、

重要な歴史的な視点になりうるであろうという自信はある。だが、サケ漁が経済活動であるというアプリアオリの視点は、いま生きる人々が、なぜ伝統的かつ古風な、低生産の漁撈技術を続けているのか、つまり伝統漁法の継承の動機づけといった問題まで明らかにしてくれない。

久しぶりにこの川を訪れてみて、一〇年ほど前にはじめて見た伝統漁法が、いまも続いていることは喜びではあったが、反面その継承は正直いって筆者の目には奇異なものに映った。というのも、この川の伝統的サケ漁は、筆者がかつて調べたときには間もなく消えるべき運命にあったし、消えゆくことに対する危惧のようなものが、筆者をこの対象に集中せしめていたからである。ところが、いまでも伝統漁法は消えていなかったのである。

新潟県岩船郡山北町。新潟県の最北で山形県と接するこの町に、大川という清流が日本海に注いでいる。この川には毎年秋になるとサケが遡上し、沿岸村落ではコド漁やモツカリ漁、オトリ漁などと呼ばれる小規模個人的、自家消費的、低生産の伝統サケ漁がおこなわれている。コド漁は、河中に設置した箱状の集魚装置（コド）にサケを誘引し、その中をのぞきながらカギでかき捕るという漁法で、日本広しといえども現在ではここ大川でしかおこなわれていない。この漁法は一八世紀半ばには、この地の文書に登場する。伝統漁法の伝統たるゆえんである。

サケ以外の魚種の場合、採捕許可を受けた者は大川水系のどの水面でも漁獲することができる。一方、サケの場合、川を九集落で九「漁場区」に分割し、山北町大川漁業協同組合鮭鱒部会員がそれぞれ自分の居住している集落の地先「漁場区」で漁をおこなう。すなわち、他の集落の「漁場区」ではサケ漁をおこなうことができないのである。

各集落では「漁場区」をさらに細かく「場所」という漁区に区切っている。各「場所」の定員は一名で、漁場管理、漁撈活動はその場所を獲得した者がおこない、原則的に他人の「場所」ではサケを捕ることはできない。この「場所」と呼ばれる漁場は、入札で配分していた。入札という「場所」配分の仕組み上、一人が複数の「場所」を落札することも可能で、実際にはサケ漁に従事する人数は少なくなる。ちなみに一九八三年四八名、翌八四年には四四名の鮭鱒部会員だけがサケ漁に従事し、この数値は全鮭鱒部会員の約三七パーセント、全漁協組合員の約七パーセントを占めるのみである。

サケの漁期は九月二十五日から翌一月三十日までの約四カ月間であるが、これはあくまで公認の漁期であり、その期間中すべてに漁に出るというものではない。個人単位で漁をおこなうために、実際はサケ漁従事者ごとにまちまちである。サケの遡上の活発な十一月末から十二月初頭が漁の最盛期で、この頃にはサケ漁師は、河原にある各自の漁小屋に泊まり込むことが多

モツカリ漁はコド漁の簡略型と考えればよい。川岸から川の中央に向かって流れを弱める遮蔽壁（モツカリ）を築き、その脇にタケシダと呼ばれる竹を流すもので、コドのような箱状の構造をもっていない。その他、産卵床に囲のサケをつないでおき、寄ってきたサケをかき捕るオトリ漁がおこなわれている。

最近では、その簡便さからこの漁法が増えつつある。

大川サケ漁の性格としては、①小規模な個人的漁獲と個人的漁場使用、②村落と密接に関わった漁場管理、③非近代的、自然素材を用いた漁具、④自家消費的な漁獲物の使用、などがあげられる。とくに、大川のサケ漁場の使用慣行は特徴的である。



図1 コド

くなる。ただし、このように漁に積極的なサケ漁従事者といえども、専門的にサケ漁に関わっている者はまったくなく、農業、林業、建築業など他の仕事で生計を立てているのである。

このように大川では、一見、現代の漁撈技術の進展から取り残されたような漁法が展開されている。しかし、この伝統サケ漁も、近代の水産行政と決して無縁ではありつつづけられなかった。

日本国内、いずこの河川も同じであるが、一九五一年に施行された水産資源保護法によって、遡上したサケは都道府県知事の認可なく漁獲することは禁じられている。さらに、河川におけるサケ採捕はサケの再生産（人工ふ化）を目的におこなわれ、国およびその委託した機関によって担われている。つまり、河川サケ漁はサケの卵を確保することが目的であり、親であるサケ本体の漁獲を目的としていないということである。採卵・採精後の親魚は払い下げられ売買されることもあるものの、その経済価値は沿岸定置網で捕れたものに比べ圧倒的に低い。そのため現在の河川サケ漁は、サケ自体で経済的自立性を保つことは困難な状況にある。サケの販路をもたない大川では、国などから支出される放流稚魚一尾あたり数円の補助金や、組合員負担金などによってサケ漁を維持している。

当然、補助金の交付権、サケ漁の許認可権を握る水産行政側の力は、河川でサケ漁をおこなう人々には無視できないものと

なっている。国や県では、サケ資源の増大をはかるため、効率のよい漁法への転換を推進し、放流数を増大させてきた。これは補助金の増額にもつながるため、在地の伝統漁法から、より大型の効率的な漁法へと多くの河川で改変されてきたのである。一括採捕などと呼ばれる大型の集中的な漁獲法は、ウライヤトメを用い、まさに一網打尽にする方法である。この方法は、遡上するサケを漏らすことなく確実に捕獲でき、かつ漁場が集中するため労働投下が少なく済み、密漁などのリスクが少なくなる。また、捕獲魚の管理がしやすく、機械化もしやすいといった利点もある。

この一括採捕への転換の潮流は、ここ大川にも押し寄せていた。一九七〇年代から新潟県内のほとんどの河川で効率的な漁法への転換が進められるなか、大川にもその動きがみられる。指導という名目で迫ってくる行政の圧力は、筆者がこのフィールドを訪ねた一九八〇年代前半には、かなり現実味をもってサケ漁をおこなう人々に受けとめられていたのである。

大川のサケ漁は先にも述べたように、個人的、小規模、非効率な漁法である。個人的であるがゆえに、それぞれのサケ漁従事者たちの漁獲数把握が困難である。また、小規模であるがゆえに、遡上するサケの全部を捕り尽くすことができず、稚魚生産数が少ない。そして、非効率な漁法ゆえに、採捕に直接関わる人数が多い。こういった理由から、一括採捕に転換すること

ではないので、今後これ以上生産を増大する必要性が、大川沿岸の人々にはなかったのである。それならば、直接自分でサケと対峙し、直接捕るという「楽しみ」を奪われた場合、サケ漁を継続する動機づけがなくなってしまうという主張が力をもちはじめたのである。その結果、一九八五年頃をめぐり一括採捕化は延期され、現在に至っても伝統漁法は存続しつづけている。

## 二 つきあいを楽しむ

サケ漁を生業として眺めたとき、一括採捕など効率的な漁法による生産の拡大は、決して無意味ではない。むしろ、行政のバックアップで転換に伴う自己資金の投下が少なくすむ状況は、サケをたくさん捕るうえで有利に働くに違いない。しかし、そのような経済性向上という目的では大川の人々は納得することはないし、連帯することもなかったのである。むしろ、「楽しみ」という浮き世とはかけ離れたことば一つが連帯のよりどころとなっていたといっても過言ではない。

それでは、大川のサケ漁のどういったところが楽しいと感じられているのだろうか。

大川サケ漁の「楽しみ」は、まずサケを通した人々とのつきあいにある。個々の漁仲間、家族、親族、ムラ内の人間、ある

が求められていたし、組合では真剣に対応策を考えていた。

漁協は大川の南隣の谷を流れる勝木川も管理しているが、ここでは早々と一括採捕を開始し、その効能については熟知していた。しかし、大川では多くの人々の反対にあい、その転換が遅れていたのである。それも一九七九年二月二十四日に開かれた鮭鱒部会の運営委員会で、一括採捕化を一九八五年頃をめどに開始することが報告され、それを機に大川の伝統漁業が消滅するのは決定的であるかみえた。ちなみにこのときの議案には「一括採捕事業目標年次は昭和六〇年頃としたい」と記載されている。

私が訪れた頃も、サケ漁を継続するうえで、一括採捕は致し方ない時代の趨勢であるといった諦めに近い雰囲気の流れていたのは事実である。しかし、多くのサケ漁師はコドなどの漁法があと数年でなくなることを嘆いていたし、それに対する反発も相当なものであった。漁師個々の反応は、一括採捕までしてサケ漁を続ける意志はないといったものが大勢を占めていた。極端な話、一括採捕化の後は漁協から脱退し、サケを捕る権利を放棄するといった者が、無視できない数出てきたのである。

昔とは違って、いまではサケで稼ぐ意味などまったくなく、また自家の食料消費に占める重要度もそれほど高くはない。サケ漁をやれなくなることが死活問題であるという、経済状況にもない。また、とくにサケで儲けようという目論見があるわけ



図2 コド小屋

いは同僚といったふうのつきあいに、付加されるような形でこれは機能する。そのため、サケ漁を通じた交渉、また捕ったサケの贈答を通じた交渉が、現在のサケ漁をおこなう人々において頻繁に繰り返される。

個々の漁仲間の交渉の場は、川岸に立っている各自の漁小屋（コド小屋と呼ばれる）である。この漁小屋生活を通じたつきあいは、多くのサケ漁師の「楽しみ」となっている。サケ漁の最

盛期には、漁に熱心な人々はこの漁小屋に泊まり込む。サケ漁師は自分の「場所」に数カ所コードやモツカリ、オトリを仕掛ける。そして、それを一日に何度も巡回してサケの有無を確かめて回る。サケは早朝と夕方暗くなってからよく遡上すると考えられているが、最盛期になるといつでも上るようになるので、漁場につねに赴かなければならない。その際、拠点とするのが漁小屋である。

古くはアンジャ小屋という、杉などの流木を組み藁で葺いた漁小屋を各自の「場所」に漁期ごとに新調していた。現在では、廃材を用いた方形のしつかりとした小屋をつくるようなり、容易には移動できないようになっていた。これは八〇一〇年の耐用年数が過ぎて、使えなくなるまで維持しながら使用する。それぞれのコード小屋にはそれを建てた所有者があり、毎年、漁場が変わるのでそれに合わせて他人のコード小屋を借りたり、自分の小屋を貸したりする。なかには二、三棟の小屋をもつ人もいた。当然河川敷は個人で所有できないので、その所有権は厳密に言えばあくまで使用权ということになる。

この小屋の貸借関係では、対価が要求されることはない。漁仲間のつきあいのなかで貸し借りは当然のものとみなされており、その貸借関係は親しさを確認するものとして喜ばしいことと考えられているのである。

さらに、この親しさを確認するものとして、漁に使うサケの小屋にたむろしているといったほうがよいかもしれない。実に、多くの漁師が小屋小屋を歩き回っているのである。そこは、サケの遡上状況、相手の漁獲状況などを知る一種の情報収集・交換の場であるが、たいていは人の噂や世間話などまで広範な会話が交わされる場でもある。ふつうのムラ内の生活でも *face to face* の関係は保たれているにもかかわらず、小屋生活においてさらに深いコミュニケーションの機会がもたれる。人と出会う場として、漁小屋生活は「楽しみ」なのである。

そんなコミュニケーションの場には、酒が欠かせない。漁小屋には酒が常備されており、訪れた人はとりあえず一杯ということになっている。そのため、サケ漁をおこなわない人も用事があるて小屋を訪れるときには、「エビスさんへのお神酒」と称して日本酒を持参することが多い。コード小屋は二、三畳ぐらいの広さで畳が敷いてある。入り口部分にも一畳分の部屋をせりだし、薪や道具の保管場所にする。中には囲炉裏のかわりに薪ストーブが据えつけられ、煮炊きはここでできる。壁には棚をつけて調味料や漁の工具、ランプ、ロウソクなどが収納されており、奥には布団や衣類、数本の酒が並べてある。その上にはサケの大漁を祈願して、漁業神であるエビス様の神札を張ったり、神棚をつくったりする。盛漁期には、昼夜を問わずサケが捕れるわけで、二四時間この小屋に泊まり込むため、一応の生活用品は揃えてある。その期間中は夕方に家のものが夕飯、朝

やりとりがある。最近、オトリ漁が増えてきていることは先にも述べたが、その囿としてサケのやりとりが漁仲間でおこなわれる。オトリ漁の場合、サケが捕れるたびに随時元気のよいものに交換していくが、カギなどの刺突具を使った場合傷みが早く、また捕れてすぐに死んでしまうこともある。最初の一尾目はもちろんのこと、その後、囿に不足したときには、漁の仲間頼んでおき、元気なサケをもらい受ける。その際、明確に代価が支払われることはなく、漠然とした貸し借りでしかない。自分が必要なときは当然のようにもらいに行くし、また他の人が必要なときは当然のごとく提供するのである。

先に、大川のサケ漁は個人的であることを述べたが、その個人的である性格は、排他的、閉鎖的なものではない。確かに自分の「場所」以外での漁はおこなうことができず、その境界は厳密に遵守されるが、漁をおこなう生活のなかでは、さまざまにつきあいを積極的に交わすのである。個人的な漁経営であるがゆえに、協力は親和性の証となりうると考えてもよいであろう。

このような小屋生活における漁小屋の貸借関係、囿用のサケの贈与関係に見いだせる親和性は、漁小屋生活における親密なつきあいからも読み取れる。サケ漁師は自分の小屋、「場所」に閉じ込めることなく、毎日頻繁に漁仲間を訪問し訪問されている。むしろ、昼間は自分の漁場の手入れをする以外は、誰かの



図3 コド小屋の内部

飯の弁当や料理の材料を持参し、それをサケ漁師は調理して食する。サケの塩引きなどは通例常備されている食品で、コード小屋での食事、酒宴には頻繁に登場する。

日常的な漁仲間の行き来によるちよつとした酒盛り以外にも、一日に何尾も捕れたときにはダイリヨウイワイと称して酒宴を催す。その際必ずつくられるのがナヤジルと呼ばれる鍋料理である。これは小屋の薪ストーブに大鍋をかけ、湯が沸騰し

表1 1983年度のあるサケ漁師の漁獲とその利用

捕獲日	雌雄	重さ(g)	漁獲時の利用法
9月29日	メス	2,700	ハツナギリ*
10月13日	メス	3,075	塩引きにする
	オス	3,750	罎にする
10月14日	オス	3,750	山形の親戚O氏にやる*
15日	オス	2,625	友人P氏にやる*
19日	産卵後のメス	2,250	罎にする
23日	オス	1,875	罎にする
30日	未成熟卵のメス	3,560	塩引きにする
11月 1日	メス	3,000	漁仲間Q氏に罎としてやる*
	オス	938	罎にする
4日	オス	2,925	塩引きにする
	オス	2,813	漁仲間R氏に罎としてやる*
	オス	2,625	漁仲間R氏に罎としてやる*
5日	メス	3,750	(自家消費)
	メス	3,750	漁仲間S氏に罎としてやる*
	オス	2,250	罎にする
6日	オス	4,500	小侯の従兄弟にやる*
7日	メス	4,500	塩引きにする
10日	オス	2,250	罎にする
	オス	3,000	漁仲間Q氏に罎としてやる*
12日	未成熟卵のメス	7,125	(自家消費)
	オス	6,375	(自家消費)
15日	メス	3,000	(自家消費)
	オス	6,000	(自家消費)
19日	オス	4,500	漁仲間T氏に罎としてやる*
	オス	3,225	伯父と小屋で煮て食べる*
20日	メス	4,500	(自家消費)
	メス	4,875	漁仲間R氏に罎としてやる*
	未成熟卵のメス	3,938	(自家消費)
	未成熟卵のメス	4,275	漁仲間R氏に罎としてやる*
	メス	3,750	(自家消費)
	メス	4,125	岩石の娘の嫁ぎ先へやる*
21日	メス	4,125	(自家消費)
23日	メス	4,500	(自家消費)
25日	メス	4,125	漁仲間R氏に罎としてやる*
26日	産卵後のメス	2,250	(自家消費)
	メス	3,750	罎にする
28日	オス	3,300	塩引きにする
30日	未成熟卵のメス	4,500	温出のオヤカタ(山林地主)にやる*
	メス	4,500	(自家消費)
12月 4日	オス	3,750	漁仲間R氏に罎としてやる*
6日	メス	4,500	友人U氏にやる*
7日	メス	6,000	(自家消費)
19日	オス	938	罎にする
22日	メス	1,425	漁仲間Q氏に罎としてやる*
	オス	4,763	塩引きにする

注 \*印は贈与・饗応に利用したもの。ハツナギリは初サケ儀礼の饗応。成熟卵をもつメスはすべて採卵した後に利用される。小侯、岩石、温出は山北町内の地名。

たところで、ゴボウ、ニンジン、コンニャク、ハクサイ、ネギなどを入れ、味噌で味つけし、サケのぶつ切りを入れるという手順でつくられる。食べる時にはサケの切り身を一度出して、野菜を注いだ上にこれを載せる。コド小屋での最高の料理とされ、客などがあるときはこれでもてなす。

漁小屋は、漁仲間の親睦の場であり、人間関係の創出の場となっている。その人間関係は新たなメンバーシップの拡大ではなく、同一のメンバーシップの関係を再確認することである。サケ漁に限らず、ムラにある山仕事や畑仕事など他の生業組織、あるいは信仰組織、社会組織でも同様の楽しみは生まれうる。

サケ漁をおこなううえで生み出される親しいつきあいは、漁の仲間内に閉じていない。さらにそれは漁をしない人々へも開かれていく。それはサケの贈答を通してである。

表1は、あるサケ漁師の一シーズンの漁獲とその利用についてまとめたものである。この漁師はこのシーズン四六尾(約一六八キログラム)の漁獲をあげている。そのうち、二七尾は自家消費(罎に使ったものも最終的には食べる)にまわされるが、実に一九尾、全体の約四〇パーセントものサケが他の人への贈与分、あるいは饗応分として利用された。このデータは漁獲時の利用の仕方であるから、塩引きにした保存のきくものが後に贈られた可能性もあるので、捕れたものの半分近くは、他人にやると考えてもよいであろう。

与える相手は漁仲間が多くそれは罎用であるが、親戚や友人にも贈答の範囲は及んでいる。それは利害に伴う贈答ではなく、純粋に贈る行為を楽しんでいるといえる。大川サケ漁の特徴である小規模個性は、捕れたサケ一尾一尾の個体への関心、執着を強くする。いつ、どこで、どれくらいの大サイズのサケを捕ったかという記憶は、他の大規模な漁をおこなう地域の人々に比べ明確である。一度に何百、何千と捕る漁法をやっているところでは、一個体に対する関心は薄れるし、記憶することも不可能であろう。まして、集団的な漁がおこなわれているところでは、捕れた魚の帰属に関しても集団的ではかあり得ない。そういうところでは自分のサケという意識は希薄であろうが、大川では一尾一尾に対して自分が捕ったということが意識化されているのである。

大川サケ漁師がサケを贈る意味はここにある。自分が捕ったサケだからこそ贈る意味があるのである。買って贈るサケとの性格の違いは歴然としているし、そもそもサケ漁師たちは買って贈るということをしない。サケはあくまでサケ漁の戦績を多くの人々に伝えるトロフィーなのであって、ささやかな自慢を遠慮することなくできる媒体でもある。もらったほうでは、返礼として「ダイリヨウしてくだい」といってエビス様に供える日本酒を携えてやってくる。この酒がまた、集まった漁仲間たちと酌み交わされるのに使われる。この贈答行為は、サケ漁

が生業として重要であった頃にもおこなわれていたと思われるが、その経済的な意味が低下したいま、サケ漁の「楽しみ」のより大きな部分を占め、大川サケ漁を継続する意義につながっている。人々をつなげる親密なつきあいを創出する機会として、現在でもサケ漁は楽しまれている。

### 三 競争を楽しむ

こうした、サケを通した人々とのつきあいを楽しんでいるサケ漁師の姿だけを見ると、その協調性にばかり目を奪われるが、サケ漁師はそう単純ではないし、お人好しでもない。彼らはこういった親和性とは裏腹に、強い競争性をもっている。そして、その競争性はサケ漁師にとって、伝統サケ漁をいっそう魅力的なものにしている。

小規模個別におこなわれる大川伝統漁法は、本来的にかなり競争性をもった仕組みをもつ。その展開過程で協調性が不可欠で、またそれ自体価値あることとしてサケ漁師は協力を惜しまないものの、それは競争的な仕組みを前提とした協調でしかない。どんなに親密なつきあいをしても、他の漁仲間の漁獲数の多寡——収益の多寡ということではない——は気になるところであるし、より多くのサケを捕るために邁進する。このようなサケを通した人々との競い合いは、親和的つきあいにもま

して「楽しみ」として感じられている。

先に、捕らえられた獲物は、いまは漁師の戦績を伝えるトロフィーとして機能することを述べたが、その最終的な成績は漁協によって発表される。これは採卵数を管理するために、漁獲数を集計するもので、各個人が何尾捕ったか各ムラの組合総代がそのムラのサケ漁師を回って調べ、漁協に報告するものである。これによってムラ内の漁獲数順位は、歴然とする。順位を血眼になって競うことはないが、順位が高いほどささやかな榮譽感にひたれるのは確かである。それはサケ漁の巧拙、熟練度の評価となつて、大川筋全体に広がることとなるのだから、漁師にとって無視できないものとなっている。

漁協の情報がなくとも、誰が何尾捕ったなどという情報は、頻繁に漁師たちが行き交い親密なつきあいが保たれる漁小屋生活では瞬時に伝わってしまう。「昨夜、誰それがどこそこで、どんな型のものを何尾捕った」という情報は、一昼夜のうち多くの漁師の周知するところとなるのである。まして「下流からたくさん遡上しはじめた」とか「下流で大物を逃がした」などという情報には上流のムラでは敏感で、それを聞いた漁師たちはすぐに漁場の見回りにかかるのである。したがって、もともと一尾一尾への関心が強いところに、そういう情報が入るものだから、一尾一尾の漁獲されるまでの来歴が語られたりもする。たとえば「この大物は下流の誰それが発見して、別の誰それ

の「場所」を駆け上り、誰それが取り損ねたものだ。この傷はその際ついたものだ」という来歴が、捕らえられたサケたちに付与されるのである。その正否は別として、自分の仕留めたサケの来歴を、漁師は誇らしげに語る。「多く捕った」、あるいは「大型のものを捕った」という情報とともに、より複雑な来歴をもった、すなわち多くの漁師たちに知られている、「お尋ね者」的獲物を捕ったという情報は伝わりやすいし、評判となるのである。この際、目撃者や漁獲に失敗した者は、来歴を興味深い話にする、また漁仲間にも積極的に「証言」する証人として重要である。これらのさまざまな情報の伝達、流布は、漁師たちの競争心を煽るのに一役買っている。

ただ大川でのサケ漁をめぐる競い合いは、漁の開始される以前にすでに始まっている。いや、むしろ競争性をもっとも露骨に現れるのは、実際のサケ漁がおこなわれる以前なのかもしれない。それは各自が漁場を確保する時点、すなわち入札のときから始まっているのである。

先に述べたように大川は九つの集落に帰属する「漁場区」に分かれている。各集落ではそれをさらにいくつかの「場所」に分割し、その集落に居住する鮭鱒部会員に配分する。「場所」は、川に大きな変化がない限り毎年ほぼ一定している。「場所」の境界は、立ち木、石、岩、沢などの地形、自然物や、家の屋根、電柱、ガードレールの支柱、杭、橋など人工物を目印にして敵

密に決められている。

この「場所」を入札などで振り分けることを、カワワケという。カワワケは本来はムラの行事として、集落の管理のもとにおこなわれていた。一九六〇年代までこのサケ漁場のムラ管理はおこなわれており、その頃まではカワワケによって得られた金は、一部漁業税などに支出する以外、すべて集落のムラマンゾウ（字費、自治運営費）として集落に納入されていた。このサケ漁の入札金によって、一年間のムラマンゾウをまかなうことができた時期もあったといわれ、サケ漁はムラにとって大きな財源であり、重要な共有財産だったのである。

一九七〇年代に入って、サケ漁の運営が完全に漁協に移管されたことによつて、その入札金はふ化事業などの組合維持費として使われるようになった。筆者が大川に赴いた頃には、漁協より「行使料」という名目で、各集落には負担金の納付が義務づけられており、入札金はそれに充当されていた。「行使料」は、当然、漁獲数の多い下流部の集落ほど負担が大きくなる。しかし、毎年の運営委員会で決められる「行使料」は、前年の各集落の漁獲数の比率が完全に反映されるわけではなく、できるだけ「行使料」を少なくしたい集落間の調整は容易ではないようだ。

「行使料」を確保するため、また漁場の配分を全員があとくされないものとするために、入札は大川ではもともと納得のいく

漁場配分の方法として認識されている。しかし、この入札という漁場配分の方法は、県など水産行政の立場からは一括採捕化とともに、大川サケ漁の改善すべき点の一つとして指導を受けている。それは入札のようないぜんとして集落に属する管理形態は認められず、漁協で一元的に漁場管理をおこなうべきだといふものである。漁場の使用権、正確に言えば漁業権は、漁協に属しているのであって、旧慣の集落帰属意識は否定されるべきものである。

だが、大川サケ漁師たちにとって、入札以外の漁場配分の適切な方法は見あたらない。集落ごとに分けてある「漁場区」、そして、「漁場区」をさらに細分化した「場所」は、彼らが伝統漁法を継続するための生命線なのである。コド漁、モツカリ漁、オトリ漁などの小規模個人的な漁法をおこなうためには、そのテリトリーが明確にされ、かつ社会的認知を受けて不可侵のものとして保証されなくてはならない。どこでも自由に漁をおこなうてよいことになる、よい漁場に人が集中し、また下流ほど人が集中するため、実際には收拾がつかなくなることは素人目にも必至である。

漁協管理のくじ引きにして割り振りするという案も検討されたが、サケ漁師たちそれぞれの限られた「場所」への執着が強いために、くじ引きといういかにも平等な方法は、受け入れられない。くじ引きだと、自分の漁場はまさに天任せで、好みに目にも必至である。

#### 四 かけひきを楽しむ

ここで一九八四年におこなわれた、あるムラのカワワケについてみてみよう。このムラは、冒頭で紹介したじいちゃんがサケ漁師として活躍しているムラである。

一九八四年八月十五日朝八時―。サケの漁場をとうろうとするサケ漁師たちは、ムラの橋のたもとに集まった。前日にすでに有線放送で、その日にカワワケがある旨連絡してある。そうではなくとも、毎年八月十五日は、マンゾウワリの日といってマンゾウの前期の収支決算、半年分の納入をおこなう日なので、ムラ中の人々は、その日にカワワケがおこなわれることをみんな知っている。いまでもこの日にカワワケがおこなわれるのは、カワワケで得られた費用が、かつてはムラマンゾウに組み込まれていた頃のなごりである。

大川流域のサケ漁をおこなう村々では、この日に合わせてカワワケをおこなう。かつて、上流のある集落だけが、八月七日にマンゾウワリの日が設定されていた。そのためカワワケもその日にやられていた。しかし、他の集落に先んじて入札するため、その価値が他の集落の入札結果に影響するというところで、このムラもいまではカワワケを八月十五日におこなうようになったという。それほどカワワケの情報に大川のサケ漁師は敏感

する、あるいはこそぞと見込んだ「場所」を確保することに、何ら自分の器量が発映できない。そのような方法はとうてい納得される方法ではない。それこそ、この漁場獲得のプロセスに自分の努力が反映されないことは、一括採捕化と同様にこの漁を続ける動機づけを失うことにつながるのである。

このように入札という方法に固執するのは、「場所」の良し悪しの差が大きく漁に影響する、いやもつと極端にいうならば、漁のいかんは「場所」を選んだときからある程度決まっていると考えられているからである。そして、各自の毎年の「場所」の見極めが、サケを捕って競い合う人々の技量のひとつとして重視されているからである。そのため、「どこの『場所』を、誰それがとつた」という情報も、サケを捕った情報と同じように漁仲間の間では瞬く間に広がっていく。巧いカギさばき、サケの寄りやすいコドやモツカリづくりなどの実際の漁撈活動中の技量とともに、それ以前の漁場決定の技量が漁を左右するという考え方は、入札に積極的な意味を与えている。ただし後述べるが、競争性の基盤であるこの技量が、漁の結果をすべて規定することはないし、規定されることがこの大川サケ漁にまた「楽しみ」を付与しているのである。



図4 川の見回り

なのである。

橋のたもとに集まったのは、じいちゃんと、このムラの組合総代であるA氏、サケ漁の長老格であるB氏、その他サケ漁の好きな三人(C、D、E氏としておこう)の計六人である。このムラには、一番から八番までの八カ所の「場所」があるが、

を見つめる目はなおさら厳しくなる。

四番の下手は、下流集落との境界である。ちょうどその下流集落でもカワワケをやっており、両方のムラのサケ漁師の立ち会いのもと、ムラの境界が確認される。かつてはムラごとの境界の争いもあったというから、その真剣さはムラ内の「場所」の境界の確認を上回り、そこには緊張した雰囲気も漂っている。四番から対岸の五番の「場所」に渡り、四番側では山の鞍部、五番側では崖の岩のくぼみを見通して、樺をもった対岸の人に「もつと右」「いや左」と指示して境を決めていく。両方のサケ漁師が、こんなところだろうと合意したときに境の確定である。下流集落との境界確認がすむと、上流へと「場所」の見回りを続けた。最後の八番（一番の対岸）へくると、ちょうど上流集落と落ち合うこととなった。ここには動きえない橋が架かっており、これが一番と上流集落との境になっていて、また、八番との境にはカラマツが立っているの、確認は下流ほど緊迫感はない。

「場所」の見回りを終えて、じいちゃんたちはムラの真ん中にある公民館に集合した。いよいよカワワケの開始である。まず、組合総代のA氏が挨拶を始める。A氏によると、近年、入札制への風当たりが強く、改善が求められているようである。その年、このムラに負担を義務づけられた「行使料」は、五七万八〇〇〇円で、その半金を八月末までに納入しなければならない

性があるかのごとく評価することもある。お互いこの程度のかけひきはわかっているの、この「場所」はうまくない」などという者があると「おまえはこの「場所」を狙っているな」などと冗談混じりにかまをかけた。しごく素朴な舌戦ではあるが、このときが自分のつけようとしていた金額の最終的な見極め時なので、和みながらも真剣さは失わない。

このカワワケに先立つ「場所」の見回りは、「場所」の境界の確認でもある。たとえば一番と二番の「場所」の境は川岸にある丸石で、これにじいちゃんは「一、二界」とマジックで書きつけて、全員で確認した。よほどの川の変化がないかぎり、この境界は例年変更されないし、また漁期が始まるとどんなに流路が変わってもこの境界は厳守されなければならない。三番、四番とこのムラでもともよいとされる「場所」へくると、境らしい。

その場にいるサケ漁師たちは異口同音に、「行使料」の高さに愚痴をこぼすことになる。どうにか来年以降、この値下げがなされないものだろうか。「行使料」が高くなったため、最近カワワケに参加する人が少なくなったとぼやく。結局、「行使料」が高額なため、これを確保するには、入札でないと金が集まらないという意見が大勢を占める。また、入札をやっても不足金が出る見込みがあり、それは落札金額に比例して負担すべきだとか、いや平等に負担すべきだとか意見が出される。じいちゃんや長老格のB氏は均等割りを主張し、比較的若い人たちは落札金に応じた比例負担を主張したが、熱い議論のすえ、結局今年も入札でカワワケを行うこと、不足金は平等に負担することに落ち着いた。

これは、後からわかったことであるが、不足分の均等割りを主張した人々は、この時点で自分たちが高い落札金をつけるのを見越していたのである。比例負担になると、自分たちの負担が増えることが予想されたために、均等割りの発言につながったといえる。また、逆に落札金に応じた比例負担を主張した人々は、この時点で自分たちが低い落札金しかつけないことを見越していたのである。そうなる、均等割りではやはり自分たちの負担が増えてしまうのである。つまり、入札の前段階から、誰が入札に積極果敢な値をつけるか、また反対に慎重な

六人では定員にも満たない。このムラの鮭鱒部会員は、その時点で二六人（全戸数は三〇戸であるから、約八七パーセントの家が鮭鱒部会に加入していることになる）もいるのにもかかわらず、わずかに二割ほどの鮭鱒部会員しかこの日は参加しなかった。もちろん、どうしてもこの日に都合が悪くカワワケに参加できない人もいるが、この低調さはすべての人がサケ漁に積極的に関わっていないことを示している。本当にぞつこん好きな人がいれば、一方でとりあえず先祖代々の既得権として権利を確保しておくという人もいるのである。ちなみに鮭鱒部会員の資格は親子間での相続が認められるが、一九七九年からは新規加入は認められなくなった。したがって、いったん鮭鱒部会をやめると二度と加入できなくなる、すなわちサケを捕る権利を喪失することになる。

じいちゃんたち一行は、橋を渡って川の状態を見回っていく。ホリ（産卵床）が埋まっているとか、流路が変わったなどとお互い「場所」の評価をしながら一番の「場所」から下っていく。冗談なども飛び出し和んだ雰囲気ではあるが、実はこのときから、入札に向けたかけひきは始まっている。カワワケの日以前に、このサケ漁師たちは川をそれぞれ見回っており、各自今年のお目当てる漁場はすでに決まっているのである。そのため自分の欲しい「場所」を察知されないように、そこにあえて否定的な評価を下したりする。またどうでもよい「場所」に、可能

図5 じいちゃんのムラの「場所」割り



値をつけるか、自他ともに予想されていたということで、このやりとりはお互いの立場からの牽制とも受けとめられる。

さてここで、「お神酒」と称して日本酒が振る舞われる。湯飲み茶碗になみなみと注がれた酒を飲み干し、入札に入る。A氏が、川のナカジマ（砂州）を削ったりするときは下流の漁師と相談すること、いま埋まっているところを漁期まで掘り込むことなど、「場所」の状況、注意事項について最終的な確認をして、入札用紙を各サケ漁師に配った。次いで、「場所」の入札順を決めるため、一番から八番までの番号を記した紙を四つ折りにし、丸盆にかき混ぜて載せ、それを長老B氏にくじ引きさせることとした。

この入札順をくじ引きで決めるのは、入札を活気あるものにするための工夫である。たとえば一番から八番まで順番に入札するとした場合、自分の狙った「場所」が何番目に入札にかけられるかわかってしまう。全員がこのムラでもっともよいとされる「場所」を知っていることから、入札の目玉に対する認識はほぼ一致する。したがって、そこは値が上がったとしても、その入札の番がくるまで、みんな値を押さえてしまうので、低調な落札金額しかつかなくなるのである。このムラでは四番がもっともサケ漁の見込みある「場所」と考えられているが、これが四番目に入札されることが決まっていると、それまでの一番、二番、三番の落札金額は低いものとなることは必至であ

い金額で落とすのが理想的である。しかし、値切りすぎると獲得する確率は減っていく。当然、次点の者と差が小さければ小さいほど好ましい入札、巧い入札ということになる。そのため一〇〇〇円、一〇〇円単位で額を刻むのが通例であるが、ときによってわずかな金額差を勘案して、金額を細かく刻んでくることもある。ちなみに、一九八三年度のこのムラのカワワケにおいて、D氏は四万三〇一〇円と一〇円単位で刻んでいる。これは四万三〇〇〇円という値段を誰かがつけたであろうことを予想し、対処したものであるといえる。このようなかけひきは、「場所」を獲得したいというサケ漁師の切なる願望の表れである。それとともに、そのかけひきの技術の巧拙、サケ漁師相互への評価とつながっている。

さて、一九八四年度のこのムラのカワワケでは、サシヒキなしの一発勝負というルールになっていたため、そこまで極端に神経質になることはなかったが、どうしても金額記入時にはみんなまわりの様子が気になるようであった。

まず第一回目の入札「場所」としてB氏は、三番のくじを引いた。A氏はさっそく、前年度の落札金額が一五万八〇〇〇円であることを明示する。ここは前年度L氏が落札したが、同氏が体調を崩し漁を続けられなくなったために、J氏が引き継いだものである。L氏は五番も落札し、二つの場所で漁をやっていたが、これも合わせてJ氏によって引き継がれている。しか

る。ランダムに「場所」を入札にかけることで、できるだけ「場所」間の相対的な値踏みさせないようにして、その場固有の絶対的な値段をつけさせようとしている。そうすることによって、落札金額をできるだけ上げるとともに、かけひきの妙を高めている。いつ意中の「場所」が出てくるかわからない。また、それを落とせるとも限らない。そのため第二候補、第三候補、第四候補、……とそれぞれのサケ漁師は目算を立て、かけひきに夢中になりながら入札していくのである。

かけひきを生み出す工夫が、入札自体を「楽しみ」と化しているのであるが、他にもそのような漁師たちを熱中させるかけひきの工夫が、入札のなかの随所に凝らしてある。たとえば、入札時に金額を書いた紙をモトフダというが、これをいったん回収したあと開札する前に、サシヒキという金額変更をおこなうことがある。金額記入時、あるいはモトフダを回収しているときの相手の顔色や挙動、言動から、相手の入札金を推測し自分の金額を変更するのである。負けていると感じるとサス（加える）、大きくつけすぎたと感じるとヒク（減らす）といって、組合総代にサス金額、ヒク金額を伝える。開札後、モトフダの金額と加減して最終的な入札金額が決定される。これによって、非常に感覚的な、緊張感あふれるかけひきとして入札が成立するのである。

サケ漁師にしてみると、入札では狙った場所をできるだけ低

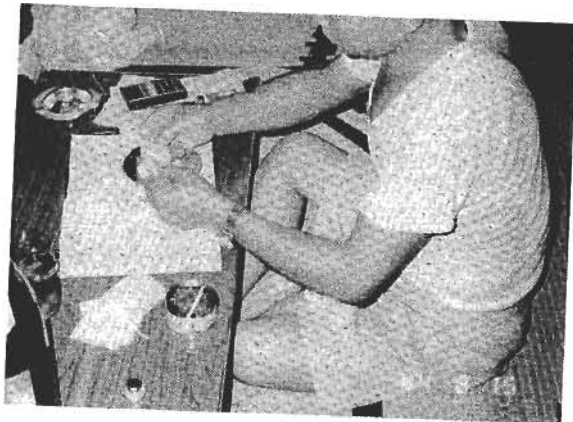


図6 開札

し、二つの「場所」をもっているにもかかわらず、漁獲数は二五尾とふるわなかった。三番の「場所」は漁獲数二五尾以下になるので、この数字は前年度の漁獲数では下のほうであり評価されるものではない。しかし、漁へ従事するものが途中交替したというハンディを背負っている。また、三番にはホリ（産卵床）もあり四番ともによい漁場としてムラで言い伝えられている。前年という短いスパンの実績、またムラで共通して認識

ことが、この年のA氏の作戦であった。「場所」を複数獲得すると、自分の漁場が広がり、ひいては漁獲が多くなることが期待される。しかし、自分一人で漁をおこなうのだから、「場所」が離れているとそれぞれの行き来だけでも時間と手間がかかり、それほど漁のびるとは考えられない。たとえば対岸にある四番と五番を落札したとすると、水量が多い敵冬期には上流の橋を回って片道一〇分ほどかけて往復しなければならぬ。移動が面倒なうえ、両方に小屋をもつ手間がかかるので、あまり離れた「場所」を使用することは好まれない。一方、A氏は、四番を第一候補にして必ず落札するつもりで臨んでいたが、あわよくばそれと連続する三番も合わせてとろうと考えた。

A氏の四番への執心ぶりは、次点を二万円以上引き離していることから明らかである。次点一〇万五〇〇〇円、以下三位一〇万二〇〇〇円、四位一〇万円と、二〇〇〇〇三〇〇〇円の僅差で競り合っており、これぐらいがこの年の四番の相場だとサケ漁師たちは認識していたが、A氏の思い入れはそれ以上に強かったということである。A氏は意図的に少々高めの額をつけ、確実に落とす戦法を用いたのである。この時点におけるA氏の作戦は、みんなから巧くやったと評価され、うらやましがられていた。ただ二カ所合わせて二三万円あまりの金を投ずることに、驚きと少々あきれとも受けとめられる声だが、若い人の

されている長いスパンの実績などにさまざまな要因を絡めながら値踏みをしていく。

しばらく後、A氏は全員が金額を記入したのを確認して札を集めた。じいちゃんを立会人として、いよいよ開札である。それぞれの名前と入札金額をA氏が読み上げる。緊張の一瞬である。結局、この「場所」は、次点に三万円あまりの大差をつけて、一〇万五〇〇〇円で読み上げているA氏が落札した。「やられた」「高すぎる」などとかすかなどよめきが起こったが、A氏の音頭でさっそく手打ちである。「タンタンタン・タンタンタン」という手打ちの音と、「どうもありがとうございます」という全員の唱和が狭い公民館に響く。これと同時に緊張がほぐれ、いまの入札にさまざまな寸評が入り冗談が飛び交う。

ひと区切りつながら、再びB氏が「場所」のくじを引き、四番が出た。その後六、五、七、一、二、八番の順で熱き戦いが繰り返された。入札がすべて終わる頃には、もう昼近くになっていた。

### 五 偶然を楽しむ

さて、表2はこのときの入札状況である。誰がどこにどれだけの値をつけたかがこれで明白になる。これを見てわかるように、四番の「場所」には全員が自己の最高値をつけている。入

札前に四番がもつともよい「場所」であるというサケ漁師たちの評判は、みごとにその金額に反映されているのである。まさに四番は本命の「場所」として、衆目の一致するところであった。この「場所」は、三番を落としたA氏が、一二万八〇〇〇円とその日の最高金額で再び落札した。じいちゃんに後で聞いた話であるが、A氏はじいちゃんに負けず劣らずサケ漁が好きで、この「場所」を毎年積極的に狙ってくるそうである。A氏は、前年もこの「場所」を落札し、四八尾のサケを捕ってムラのその年のレコードホルダーとなっていた。その場所のよさは彼がいちばんよく知っている。この四番と隣り合わせにある三番も同時にとる

表2 1984年度の入札状況 (単位:円)

入札参加者	1番	2番	3番	4番	5番	6番	7番	8番	合計 入札額	平均 入札額
じいちゃん	15,000	10,000	75,000	100,000	14,000	*86,000	25,000	*85,000	410,000	51,250
A	20,000	51,000	*105,700	*128,000	10,000	42,500	10,000	35,000	402,200	50,275
B	20,000	*76,000	30,000	105,000	20,000	80,000	*25,000	30,000	386,000	48,250
C	20,000	44,000	60,000	80,000	*56,000	68,000	10,000	43,000	381,000	47,625
D	*35,000	30,000	73,000	102,000	30,000	60,000	10,000	35,000	375,000	46,875
E	25,000	35,000	55,000	75,000	18,000	45,000	19,000	55,000	327,000	40,875

注 \*印がついているのが落札者。

なかにあったことも事実である。

一方で、じいちゃんの戦法は、A氏とは異なっている。じいちゃんの落札した「場所」は六番、八番である。じいちゃんは六番と八番の「場所」が好きで、両方に小屋を持って毎年そのどちらかを狙っている。両方ともムラのサケ漁師のなかでは、四番、三番に次ぐ中位の「場所」程度に評価されている。じいちゃんは前年も八番を落札し四六尾のサケを捕って、わずかに二尾差ではあるが、A氏におくれをとっていた。しかし、じいちゃんには負けたという意識はないし、まわりのサケ漁師もこの戦績をA氏と同様に評価している。

じいちゃんは、いわゆる「本命」ではないところでのよい漁をあげることに楽しみを見いだしている。といつても「大穴狙い」ではない。難しいところで捕ることに、技量の本質を見いだしているといつてもよい。これはじいちゃんのパーソナリティと深く関わってくるのであるが、大川サケ漁の性格の一部分——賭けの要素——を表しているともいえる。

じいちゃんも四番がもつともよい「場所」だと知っていて、自己最高金額は確かにそこにつけている。また、六番、八番が中位の評価しか受けていないことも熟知している。本来ならば四番を狙うのが常套ではないかと思われるのだが、じいちゃんは六番、八番のどちらかにこだわる。それには上記のようなじいちゃんの狙いとは別に、いくつもの理由がある。

じいちゃんは長年、六番、八番に関わるなかで、ここにムラのサケ漁師が下す評価以上のものをもつようになっていた。家に近いとか、自分の小屋があるからといったやや消極的な理由以外にも、そこは砂などを取り、整備することでよい漁場たりうると信じているのである。それと長年同じ「場所」を続けたことで、どこにサケがつきやすいかわかるし、その「場所」の特性といったものも熟知しているという。したがって、どのあたりにコドやモツカリ、罟を仕掛ければよいかなどは、他の「場所」に比べわかつていたのである。これは「場所」に対する愛着に近いものとなってきている。

じいちゃんはこの愛着が、他のサケ漁師のなかにもあることを知っている。たとえばA氏なども四番をよく落としていた。で、それへの思い入れがひとしおであろうことは想像に難くない。そういう「場所」を積極的に狙いに行くことには気が引けるのである。四番とつきあいの深いA氏に対するある種の遠慮めいたものが、じいちゃんにはある。また、相当高額の値をつけないと、四番を好むA氏を上回ることはできないことも知っているのである。このような考えは、じいちゃんだけではなく他のサケ漁師にもある。したがって、じいちゃんの狙っている六番、八番に対しても法外な額をつけて挑戦するものはいない。じいちゃんは、六番こそ次点B氏との差六〇〇〇円で競り落としていたが——実はB氏もこの「場所」を狙っていた——、八

番に至っては次点E氏に三万円の大差をつけて落札している。じいちゃんの落札金額が八万五〇〇〇円で、じいちゃん以外の五人がつけた平均金額が四万円弱であったことから、じいちゃんのこの「場所」への思い入れのほどがうかがえよう。A氏が四番を確実に落とすにいったように、じいちゃんもまた八番を確実に狙っていたのである。

カワウケは、入札後に微調整される。これは入札後にサケ漁師相對でおこなわれる。企図していなかった「場所」を落とした者は、誰かわりにやってくれる者を探し譲ろうとするし、どうしても落札することのできなかった者は、複数落とした者に頼んで譲ってもらうということがおこなわれる。この年もこの微調整がおこなわれている。

B氏は二番と七番を落札した。七番は、じいちゃんと同額で、年長者のB氏に落とされたものである。しかし、B氏はこの「場所」は、あまり本意になかったものではなかった。狙っていたのはじいちゃんと競合した六番である。一方、じいちゃんも意中の六番、八番を落札したが、これは連続した「場所」ではないし、もともとどちらかが落札できればよいという考えであった。そこで二人で話し合われ、じいちゃんは六番をB氏に譲るかわりに、七番を譲ってもらった。これで、連続した二つの「場所」をじいちゃんは手に入れたのであった。

七番はコンクリートの護岸が施され、サケの休むところがない。かくして、サケが遡上する前の熱き競争は終わった。大川サケ漁では、「場所」を獲得する行為そのものに、サケ漁師それぞれのかげひきの技量が反映される仕組みになっていることがおおよそおわかりいただけたかと思う。サケとのかけひき——漁の前に、人間とのかけひきがこのサケ漁には仕組まれており、それは前者にもまして重要視され、競い合いとして楽しまれているのである。

さて、このサケ漁師どうしのかけひきは、それぞれが「場所」を獲得することで勝負がついたが、いよいよ本質的な競い合い——サケ漁が開始される。はたして第一段階のサケ漁師間のかげひきの結果は、最終的な結果に結びつくのであろうか。

表3は一九八三、八四年度の「場所」ごとの落札者、そして落札金額とその順位、漁獲数とその順位を対照したものである。まず、落札金額の変動を見ると、金額自体は変動するものの、その順位はそれほど大きく変わっていない。八三年度の一、二位（三番と四番）と、三、四位（八番と六番）は、次年度それぞれ入れ替わっているが、五、六、七、八位の下位の「場所」は動いていない。「場所」に対する相対的な評価は、年が変わってもそう大きな変動を示さないという傾向がありそうである。

これは一九八三年度の落札金額の順位と、その結果おこなわれた漁の結果である漁獲数の順位とに、同様な傾向があることから理解できよう。サケ漁師ごとのデータしかないので完璧な

いたためもつとも悪い場所とされる。例年最低金額しかつかないところであるが、じいちゃんの好きな六番、八番にとつてはメリットがある。それは捕り逃がしたサケを追うところとなるからである。逃がしたサケは急に上つたり下つたりするが、それが「場所」の境界を越えると、もう捕る権利はない。したがって、長い川筋を自分の漁場としてもっていたほうが有利である。一つの「場所」として七番は最低であるが、上下の「場所」と組み合わせるとそれなりの意味をもつのである。安値がついたため、これを落札してもそれほど負担にはならないのも好都合である。

B氏もこの点に関しては同じような考えをもっていた。そのため六番、七番でじいちゃんと競合したのである。しかし、六番を逃がしたのでは元も子もない。前年漁獲数六尾で、最下位という七番だけではどうしようもないのである。そこで七番を譲るかわりに、六番を譲ってもらったのである。こうなるとB氏は、落札したもう一つの「場所」、二番の処遇について考えなければならぬ。二番と六番はかなり離れていて、両方もつことは年輩のB氏には荷が重すぎる。二番はよいとされる四番、三番の上手にあり、六番とそれほど変わらぬ評価を受けている。B氏は前年六番の「場所」でA氏、じいちゃんに次ぐ二六尾を仕留めている。結局、B氏は二番を、所用でカワウケに参加できなかつたが「場所」が欲しいF氏に譲ることとした。

対照はできないが、落札金額の高い「場所」ほど漁獲数は多くなっているといえる。この漁獲数の順位が、翌年の入札に影響を与えるため、落札金額順位もほとんど変わっていないのである。漁獲数が完全に翌年の落札金額の順位を規定しないのは、

表3 1983、84年度の落札者、落札金額、漁獲数とその順位

場所	1983年度落札者	落札金額(円)	落札金額順位	漁獲数(尾)	漁獲数順位
1番	D	43,010	7	6	7
2番	C	75,000	5	22	6
3番	L→J	158,000	1	*25	*4
4番	A	135,800	2	48	1
5番	L→J	51,500	6	*25	*4
6番	B	81,000	4	26	3
7番	H	35,000	8	6	7
8番	じいちゃん	95,000	3	46	2

場所	1984年度落札者	落札金額(円)	落札金額順位	漁獲数(尾)	漁獲数順位
1番	D	35,000	7	1	7
2番	B→F	76,000	5	3	6
3番	A	105,700	2	*20	*4
4番	A	128,100	1	*20	*4
5番	C	56,000	6	10	5
6番	じいちゃん→B	86,000	3	30	1
7番	B→じいちゃん	25,000	8	*27	*2
8番	じいちゃん	85,000	4	*27	*2

注 \*は2「場所」使用した結果、→は落札者と使用者が異なる「場所」を示す。

た「場所」で自分以上の好成績をあげられたのだから、心中穏やかならぬものがあったに違いない。ただし、たくさん捕ると、すなわち漁の量を究極の目的としているわけでもないし、先に述べたように、たいていこういうときには大物を捕ったとか、多くの来歴を有するサケを捕ったなどと漁の質を話題にして、満足感にひたれる機会があるので、この結果だけをもって、二度とサケ漁をやりたいなくなるなどという悲痛な感じはまったくない。ささやかな勝ち負けがそこに存在するだけである。このような微細な部分での不確実性が、実力競争のサケ漁のなかに、賭けの要素を盛り込むこととなる。そしてこの偶然性がえもいわれぬもう一つのおもしろさを、サケ漁に与えているのである。これに生活がかかっていたら、そんな暢気なことはいってられないであろうが、経済性の低下した現在となつては存外陽気な「楽しみ」と化している。

大川では「サケは各家のエビス様に供えられるために、川を遡ってくる」と語られる。これは一つにエビス神の漁業神としての性格を説明したものであるが、もう一つにサケの獲得の不確実性を表現したものであるといえる。そのため、遡ってきたサケはあらかじめ供えられる家が決まっているものとされる。どんなにコドの奥の難しいところにおいても、自分の家のエビス様に供えられるために上ってきたサケは、確実にカギにかかるとされ、逆に目の前にいてかき捕りやすいようにじつとしてい

先に述べたような「場所」に対する個々の思い入れや、長期スパンの実績に関するムラの評価などといったものが、毎回入札時にファクターとして入ってくるからと想像される。

大まかにみて、第一段階のかけひきの結果——入札の結果が、最終的なかけひきの結果——漁獲数につながるというてよいであろう。入札で最下位の「場所」が、漁獲数で最高位になることはほとんどない。また、落札金額の高いところは、転んでもほとんどに捕ることができず、この連関性が、サケ漁師たちを入札に真剣に取り組ませることとなる。

しかし、一方で細かくみると、第一段階のかけひきの結果は、最終的なかけひきの結果と微妙にずれている。落札金額が中位の「場所」でも、場合によっては漁獲数が最高位になる可能性があるのだ。一九八四年度のカワフケでは、A氏が四番、三番という落札金額一、二位の二つの「場所」を積極果敢に落札した。じいちゃんも七番、八番という得意の「場所」二つをものにしている。ところがこの年度に実際に漁獲数トップに立ったのは、入札においてじいちゃんとのかけひきに敗れ、交換で六番を譲ってもらったB氏であったのである。二番、七番を譲ってまでしてどうにか手に入れた「場所」で、まわりの人より多くの成果をあげたB氏は、さぞかしほくそ笑んでいるであろうし、大勝負に出たA氏はその目論見がはずれたことに、若干なりとも悔しい思いをしたことであろう。じいちゃんとして、譲つ

るサケでも、他家のエビス様に供えられるために上ってきたサケは、どうあがいてもカギをかいくぐって逃げてしまうといわれている。このことから「サケにはゲタジルシ(家印)」がついているとまでいわれるのである。このような伝承的言説は、古くからこのサケ漁に人力では越えがたい不確実性を認めていたことを示している。

### 六 伝統を支える人たち、楽しむ人たち

表3に戻ろう。一九八三年度、八四年度の「場所」とそこを落札したサケ漁師の関係を見ると、一番を落札したD氏、四番のA氏、六番のB氏、八番のじいちゃんと、全「場所」数の半分が前年と同じサケ漁師によって使用されている。残りの半分は、じいちゃんやA氏によって吸収されたものも含め、その落札者が移動している。前年七番とともに最下位の漁獲数しかあげることのできなかつた一番を、翌年も懲りずに落札したD氏の意図は、複雑すぎてはつきりと推し量ることができないが、「大穴」的な狙いがあったのかもしれないし、この「場所」にD氏特有の愛着があったのかもしれない。あるいは他を落札する意図はあったが、じいちゃんなど漁を好きなものたちに阻まれた結果、仕方なくこの「場所」しか確保できなかったということかもしれない。いずれにせよ、じいちゃん、A氏、B氏の三

表4 1979～84年度の漁獲数とその順位

	1979年		1980年		1981年		1982年		1983年		1984年		平均順位
	漁獲数	順位	漁獲数	順位	漁獲数	順位	漁獲数	順位	漁獲数	順位	漁獲数	順位	
じいちゃん	9	7	28	3	58	1	39	3	46	2	27	2	3.00
A	13	4	38	2	55	3	46	1	48	1	20	3	2.33
B	33	1	12	4	47	4	19	5	26	3	30	1	3.00
C	12	6	—	—	—	—	1	7	22	5	3	5	5.75
D	5	9	—	—	35	5	23	4	6	6	1	6	6.00
E	—	—	11	5	10	8	15	6	—	—	—	—	6.33
F	15	3	67	1	57	2	43	2	—	—	10	4	2.40
G	35	1	5	7	18	7	—	—	—	—	—	—	5.00
H	—	—	6	6	—	—	1	7	6	6	—	—	6.33
I	—	—	—	—	25	6	—	—	—	—	—	—	6.00
J	—	—	—	—	—	—	—	—	25	4	—	—	4.00
K	6	8	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	8.00
L	13	5	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	5.00
M1	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
M2	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
M3	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
M4	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
M5	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
M6	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
M7	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
M8	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
M9	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
M10	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
M11	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
M12	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
M13	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
M14	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
M15	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—

注 1979年度までは、「場所」が9区あった。K、L氏は途中死去。—は、漁不参加を示す。

人はかなり計画的に「場所」を落札している。

これはこの三人が、他のサケ漁師たちよりもサケ漁に対し積極的な姿勢で臨んでいることを予想させる。同じ「場所」を落札するためには、事前の周到な見極めと意気込みめいたものが相当必要なのである。

表2の一九八四年度の入札状況を見ると、さらにこの積極姿勢は明らかになる。

一九八四年度の入札に参加したサケ漁師たちは、一番から八番までの「場所」にそれぞれ自分の評価する金額をつけている。それを合計するとじいちゃんが四一万円ともっとも高額をつけていることがわかる。以下、A氏、B氏、C氏、D氏、E氏の順で、じいちゃんの平均入札額が五万一二五〇円なのに対し、最下位で「場所」がとれなかったE氏は四万八七五円と一万円以上も差をつけられている。これは、じいちゃんや、A氏、B氏ほど、サケ漁に対し金を投じない—積極的な姿勢で臨んでいないことを示しており、これでは「場所」をとれなくても仕方がない。

じいちゃん、A氏、B氏三人のサケ漁に対する積極姿勢は、一九七九〜八四年度の六年間の漁獲状況を見ることによりさらに明らかになる。これをまとめたのが表4である。

これを見ると一九七九年度から八四年度までの六年間で、三人が「場所」を獲得し漁をおこなっている。しかし、毎年欠

(漁獲数単位：尾)

かさず「場所」を落札しているのは、じいちゃん、A氏、B氏のたった三人だけである。六年間のうち五回参加したF氏、D氏、四回参加したC氏、三回参加したG氏、H氏、E氏がこれに次ぐ。この点からしても、この三人がサケ漁に積極的に関わってきたことが明らかである。サケ漁に積極的な漁師は、必然的に「場所」の獲得に熱心になるはずで、先に述べたように高い金額を入札でつけてくる。その積極姿勢は、毎年継続されていると考えられるのである。

さらに、この六年間の平均順位を見てみよう。じいちゃんは平均順位三位、A氏は二・三三位、B氏は三位とだんぜん好成績をあげている。五回参加したF氏も二・四位とよい成績をあげているが、それ以下のサケ漁師はD氏六位、C氏五・七五位、G氏五位、H氏六・三三位……とじいちゃんたち三人に比べ、圧倒的に低い順位に甘んじている。つまりじいちゃんたち三人は、毎年参加するだけでなく、参加したうえでよりよい成績をあげているのである。これはじいちゃんたちが、よい「場所」を積極的に獲得した結果であると、まず第一に考えられる。

また、根本的にサケ漁が好きのため、サケ漁に従事している時間が長くなっているとも考えられる。大川では個人的にサケ漁が営まれているため、漁の活動時間は個人的に管理され、公的な漁期中であれば一日中出ようと、あるいはまったく出なくとも問題ない。漁撈活動の時間に関するデータがないので、明

確なことはないが、サケ漁に積極的な人ほど漁場に出る頻度、時間は多くなり、サケとの遭遇の可能性も高まると推定されるから、じいちゃんたちのような積極派が好成绩をあげるのはごく当然のことなのである。

この結果、現在のこのムラのサケ漁師（鮭鱒部会員）は、おおよそ次の三つの層に分解していると考えてよかろう。

まず、第一に、じいちゃんたちのように入札において高い金額をつけ、また、毎年よい「場所」を確保し、なおかつ好成绩を残す積極的な層（表4のじいちゃん、A、B）である。第二に、ときどき「場所」を落札するが、そんなに高い金額を出してまでよい「場所」をとるほどサケ漁に執着しておらず、当然、漁獲も大して多くない層（表4のC、D）。そして、最後に漁場にまったく参加することなしに、その権利だけは確保している、サケ漁には消極的な層（表4のM1、M15）である。数の面からいうと、積極派は少数であり、消極派が大多数を占める。大川のサケ漁は、そんな一部のほんとうにサケ漁が好きなたたによつて支えられているといっても過言ではない。

大川流域では、「カワドにあつたら天気がいいね」といってはない」といわれる。カワドとは、大川流域でサケ漁をおこなう人を呼ぶときに使う伝承的なことばである。サケは秋冬に雨が降って川が増水したときに多く上つてくると考えられている。したがって、「お天気でよかつた」などというおもうものなら、

を現実にも負担しているのも彼らなのである。まさに彼らは、「カワドの中のカワド」といえよう。

一方で、毎年落札しなくとも、ときおり顔を出す第二の層も十分カワドである。毎年どれくらい捕れるかわからない不確定なものに、じいちゃんたちと一緒に数万円から一〇万円以上の費用を投ずるのであるから。じいちゃんなどは一八四年度には、一尾あたり四〇〇〇円強もの出費をこうむったことになる。A氏に至っては一尾一万一〇〇〇円強になる。一尾あたりの単価は、むしろ買ったときのほうが圧倒的に安いのであつて、この金額は川で捕れたサケの値段として考えたら法外なものになる。この面だけにとらわれると、サケ漁などばかばかしくてやつてられないことになるが、じいちゃんたちはそれ以上の漁を続ける動機づけがあるのだから、決してこんなことに挫けない。第二の層のサケ漁師も、その点では変わりはない。第二の層に属すると思われるF氏などは、一九八四年度には、一尾あたりに二万五〇〇〇円あまりもかけているのである。彼らもサケ漁を繰り返すなかで挫けることさえなければ、じいちゃんたちのような「カワドの中のカワド」になりうる気質と、資質とを立派にもっているのである。

カワドの逆鱗に触れることとなるのである。

カワドは一種山師的な側面をもっており、融通が利かず危なっかしい性格をもつが、反面頑固で気骨があり、男気のある特別な気質をもつた集団としてとらえられている。サケ漁の支障になるときには一致団結してことに当たるが、通常の漁の場合では競争心が強く、反目することも少なくないという二面性をもつものとして語られるのである。この協調と競争という気質の二面性は、先に述べたような大川の伝統漁業の本質によつて性格づけられたものである。

古くは、小作人がカワドとしてサケ漁を始めたりすると、土地を貸している地主オヤカタは、「米、味噌食わせねえぞ」といって脅したといわれる。地主としては、食うだけで精一杯の者が、先の見えない不安定なサケ漁に従事することをネガティブな目で見ていたのである。そんな暇があるならば、出稼ぎにでも出たほうがよいといった現実的な視線がここには注がれている。サケ漁のある種「道楽視」することは、昔からあつたのである。

このカワドというフォークタームは、じいちゃんたちを形容するにうってつけのことばである。大川において、一括採捕化反対に強い意見をもつのは、このじいちゃんたちのようなサケ漁に積極的な人たちであるし、漁協などの運営に直接関わっているのも彼らである。また、サケ漁の運営にかかる多くの費用

## 七 「楽しみの生業」論へ向けて

以上、伝統漁業を現在でも継続する動機——楽しみ——と、その担い手について細かくみてきた。かつて、大川サケ漁には、生活するためにおこなう仕事としての意味が強くあつたことは間違いない。その経済的な重要性には見過ごせないものがあつたゆえ、大川流域には精緻なサケ漁業の管理体系が存在したし、強固な村落規制がそれにかけていたのである。その仕組みは、かつては漁場使用、漁撈の機会を村落内の成員に階層差に関係なく平等に振り分けることに機能していた。しかし、サケ漁がその経済性を失うなかで、「楽しみ」が強く現れるようになり、伝統を維持する原動力として機能するようになったのである。

この「楽しみ」としての局面を、生業の零落したものとみるべきではない。その「楽しみ」としての性格は、経済活動としての意味が削ぎ落とされる以前から保持していた、伝統漁業の本来の性格と考えるべきなのである。

この「楽しみ——遊び」の要素は本来的に伝統漁業が具備していたものであつて、それをとりまく社会状況の変化によつていま顕在化したにすぎない。伝統漁業が根本的に変化したのではなく、経済活動としての意味が薄れゆくに従つて、より目立

ちやすくなっただけなのである。それは伝統を維持するという目的で、人為によって「遊び」へと転換されたのではない。毎年の漁の繰り返しなので、自然と見方が変わってきたのである。

大川のサケ漁は仕事や労働の対概念である余暇になってしまったかという点、そうではない。大川でサケを捕る人々は、サケ漁を余暇だとは決して認めないであろうし、またそういうことを愉快には感じないであろう。ましてや仕事の合間に釣りに出かける都会人のなぐさめごとなどと同じなどは速断してほしくないはずである。なぜなら、彼らはいまだにサケを捕って暮らしてきたという歴史を背負っているし、サケを捕る権利はムラやそこで生活する自分たちの財産という意識が払拭されていらないからである。さらに、伝承性を強くもつ伝統漁業は、かつて経済としての意味が重要であった頃の記憶をも伝承しているからである。

また、サケの人工ふ化事業という、ムラを超越した社会性をもった活動に自分たちは携わっているという彼らの使命感に目を向けると、この活動を単なる「遊び」として位置づけるわけにはいかない。社会的重要性を担っているという自負と自信は、彼らが漁を続けるうえで不可欠なものになっているのである。伝統漁業が、単なる「遊び」と社会的にも位置づけられるとき、彼らはその活動から撤退していくに違いない。

大川の伝統サケ漁をおこなう人々のなかには見いだされている。そして、その感覚は現代に残存する伝承性を有した活動に共通してみられる感覚で、たとえば、大川流域では山菜採り、ナギノ(焼き畑)、女性がおこなう河川敷の野菜づくりなどにも、サケ漁と同じくフローの感覚が生み出されているのである。

この伝承的活動のフローは、「遊び」と「遊びでないもの」との区別が判然としなくなった現代の消費社会によってもたらされたものではなく、生産活動として経済に組み込まれていた時代から所与のものとして存在していた。生業ということばから拭いきれない経済性や生産性は、ある部分では本質であるが、全面的にこのことばを規定することはない。そういうものの剝離したところに現出する遊楽性もまた、生業の本質の一部なのである。

いまや、伝承的な生業活動には、経済性や生産性を無視しておこなわれているものが多い。実質的な生活は、別の経済性や生産性に裏打ちされた方途によって維持されていることがほとんどといってもよいであろう。しかし、その観点から、伝承的生業が取るに足らないものであるなどと決めつけてしまうのはあまりにも速断すぎる。また、もともと生活を規定しない、副業的な役割しか果たしていなかったのではないかと過小評価するのも拙速すぎる。人間が生きるには確かに経済性や生産性といったものが生業に求められるが、その要因のみが生業を始め

大川の伝統サケ漁に「遊び」を見いだす際の「遊び」と表現するものは、J・ホイジン<sup>(1)</sup>がいうような聖と対立するもの、またR・カイヨワ<sup>(2)</sup>が強調した純粹な「遊び」ではない。実社会における生活の規制や束縛から解放された、自由で主体的な自己目的的、自己完結的な非生産活動としての純粹な「遊び」ではないのである。大川のサケ漁には、経済を支えていた時代からの社会的拘束が今でもかかっている。そして、サケ漁師の意識において、サケ漁は生産活動であるという自負が捨てがたいものになっているのである。カイヨワいうところの、現実の世界と対立し隔離された活動として、大川サケ漁は存在しえないのである。

この際、生業あるいは労働と、「遊び」を二分法的に対立するものとして考えることは無意味であろう。もちろん労働ということばに、ヨーロッパ的な労働観によって抽出された、近代社会の「疎外された労働<sup>(3)</sup>」というイメージがつきまとうのは事実である。また、労働は人間に課せられた重荷であるという側面も無視できない。しかし、自立、自律した労働が貫徹されるとき、その内部に使命感や沈潜している「楽しみ」を引き出すのは、何もこの大川のサケ漁師ばかりではないのである。

労働の領域にも、「遊び」と同様に楽しさへ没入できる感覚が存在することをM・チクセントミハイは指摘した<sup>(4)</sup>。そしてその没入観をフロー(Flow)と名づけたが、まさにこのフローが、

る、あるいは継続する動機づけにはなりえないのである。

本業―副業と生業を分類した場合、それは経済的な収支の全体を相互に充たすための活動として、生業が存立するという見方にとらわれることになる。本業と副業の合計が、人間生活の活動を規定することになるのである。その際、副業は、本業の補完的な役割を期待されているのであって、それにはやはり経済性や生産性が課せられている。そのため、本業が拡大し、家計経済の必要量を超えれば、副業は不要の活動となり、やがて消失することとなる。

しかし、この区分を捨てて、家計経済と深く関わりそれを目的化した活動と、それを目的化しない生産活動とに分けたとき、この両者の関係性は、本業と副業という生業区分に現れる関係性とは異なる生活像を浮かび上がらせてくれる。実際の人間生活には、生産を伴う活動であるにもかかわらず、生産の多寡や経済性自体を目的化していない活動はたくさんあるのだ。生産活動は、それぞれが自律的であり、必ずしも合わせないと人間生活の全体を支えきれないという代物ではないのである。そして、相互の入れ替わりもありうる。目的化しない活動は、あくまでオプショナルな行為で、これをおこなわなくともいつかこうに生活に支障をきたさない活動であるといえる。その意味でこの活動は、生活の周縁的な領域に成立する生業―マイナー・サブシステム<sup>(5)</sup>(第十二章参照)―と表現される。しかし、それ

は経済性などの要因には左右されない、強固な伝承性をもつ可能性があるのである。

いままでの民俗学における生業研究で描かれてきた伝承的な世界——自然とともに生きる人々に対して、生産物すべてが生活維持に不可欠であった、またその生産が生産物獲得を目的としておこなわれる活動であったというイメージ——は、はたしてほんとうであろうか。山野の山菜やキノコの採集、海辺の貝類の採集、水田のまわりの漁撈などは、本当にカロリーやタンパク質摂取のために、あるいは換金のために必要不可欠で、それを目的化しておこなわれていた活動なのであるか。むしろ活動そのものもつ魅力自体が目的化され、その目的こそが、生業を始めたり継承したりする原動力たりうるのではないだろうか。現代において「遊び」とみえる伝承的生業は、昔から「自然」と遊ぶための仕掛けだったともいえる。

#### 文献

- (1) ヨハン・ホイジンガ／高橋英夫訳「ホモ・ルーデンス」中央公論社 一九七一年
- (2) ロジェ・カイヨワ／多田道太郎・塚崎幹夫訳「遊びと人間」講談社 一九七三年
- (3) ジャン・ボードリヤール／今村仁司・塚原 史訳「消費社会の神話と構造」紀伊國屋書店 一九七九年
- (4) ミハイ・チュクセントミハイ／今村浩明訳「楽しみの社会学



## 編者略歴

篠原 徹 (しのはら・とおる)

1945年 中国に生まれる

1969年 京都大学理学部卒業

1971年 京都大学文学部卒業

1983年 岡山理科大学教養部助教授

現在 国立歴史民俗博物館民俗研究部教授  
文学博士

著書 『自然と民俗』(日本エディタースクール出版部, 1990)

『海と山の民俗自然誌』(吉川弘文館, 1995)

現代民俗学の視点1

## 民俗の技術

定価はカバーに表示

1998年5月15日 初版第1刷

編者 篠原 徹

発行者 朝倉 邦造

発行所 株式会社 朝倉書店

東京都新宿区新小川町6-29

郵便番号 162-8707

電話 03(3260)0141

FAX 03(3260)0180

<http://www.asakura.co.jp>


<検印省略>

©1998 <無断複写・転載を禁ず>

教文堂・渡辺製本

ISBN 4-254-50511-6 C 3339

Printed in Japan

 <日本複写権センター委託出版物・特別扱い>

本書の無断複写は、著作権法上での例外を除き、禁じられています。  
本書は、日本複写権センターへの特別委託出版物です。本書を複写  
される場合は、そのつど日本複写権センター(電話03-3401-2382)  
を通して当社の承諾を得てください。